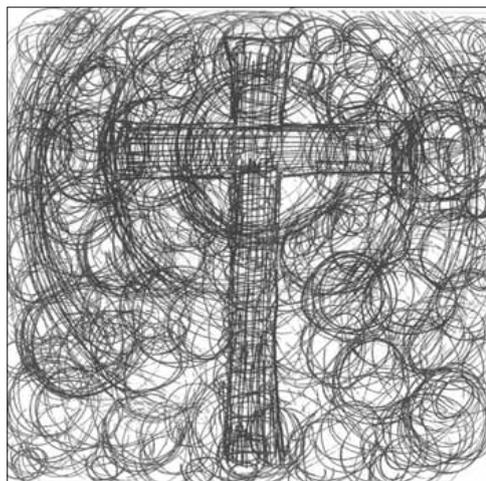




カトリック町田教会
町田市中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。第二の掟は、これである。
「隣人を自分のように愛しなさい」

マルコ 12:30 ~ 31

平和を祈る

助任司祭 天本昭好

たまの休みに、何を買おうけでもないので街を歩いていると、行き交う人の雰囲気やお店の活気が、なんとなく伝わってきて気分転換になることがあります。そんな気分転換を求めて、ちよつと足と背を伸ばして行く街のひとつに銀座があります。銀座には教文館というキリスト教書籍を扱う本屋があり、特に買っただけでもないのに、あれやこれ

や眺めているだけでなんとなく面白くも、銀座に足を伸ばす理由になっています。当然のように、銀座には本屋以外にも様々な店が並んでいます。フロアの案内にフランス語でアナウンスが流れるデパートや、敷居の高いブランドショップ、なんとなくレトロな感じのする洋食屋さんなどなど、日本の豊かさを凝縮したような街が銀座の

特徴かもしれません。そんな銀座の街を歩くことは、わたしにとって格好の休みなのかもしれません。同時に銀座という街を歩いていると、目にする、耳に聞こえてくるのが普段の生活から離れていることのようにも思えて、あまり使うことのない私の思考回路が刺激されるようです。そんな刺激がある街はなかなかありませんが、もうひとつ私にとって刺激的な街、忘れられない街があります。

それは旧ユーゴスラビアのコンボ共和国にあるプリズレンです。神学院入学の前年の一九九九年の秋、ちょうどNATO軍の空爆が終わって半年が経ち、KFORと呼ばれる多国籍軍のもとでコンボの秩序が保たれていたときのことです。オスマントルコの生活様式が当のトルコよりも色濃く残っているようなその街で見聞したことは、日本で生活している私にとって衝撃的な体験でした。目の前を自動車のように走行する戦車の隊列や時たま聞こえてくる銃声など、数え上げたら切りがないほどです。ただ不思議なことには、それらは仕方のない現実だと受け止めていました。民族対立によって破壊から秩序へと立ち直るために必要なことだと納得したものでした。かえって、そのようなことよりも心に残っている光景があります。繁華街と思える通りを歩いていくと、何軒かの商店の店頭にはアメリカ製のタバコや飲料水が山のように積みまわっていました。そんな通りの隅に、商品をばら売りしているキヨスクのような店番をする幼い女の子の姿がありました。一方でドイツマルクの立て看板の店があつたので覗いてみると、日本のメーカーのゲーム機で遊んでいる男の子たちの姿が目飛び込んできました。何気ないはずのこの光景は、今でも鮮明に記憶に残っています。なにか私にいまでも強く訴えかけるものとして残っています。

詩人の茨木のり子が残した詩にこんな詩があります。「わたしが一番きれいだったとき/わたりの人達が沢山死んだ/工場で海で名もない島で/わたしはおしゃれのきつかけを落としてしまった/わたしが一番きれいだったとき/だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかった/男たちは拳手の礼しか知らなくて/きれいな眼差だけを残り皆発つていった」(「わたしが一番きれいだったとき」一部分のみ引用) 今の物質的には豊かな時代に生きる私たちにとって、この詩が訴えかけている意味はなんでしょうか。かつて日本は戦争を経験しています。不条理な現実を前に仕方がないで済ましてしまったとき、もしかすると再びこの詩と同じものを詠むときが訪れてくるかもしれません。もしかすると、わたしの記憶に訴えかけることもここに重なってくるのかもしれません。

前教皇ヨハネ・パウロ二世は、訪日したとき、平和アピールでわたしたちに訴えかけました。「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」このアピールを受けて、日本のカトリック教会は毎年八月六日から十五日までを平和旬間と定めて祈っています。

平和について互いが語っていったとき、仕方のない現実として済ます私たちの姿ではなく、ピースメーカーとしての私たちの姿が見えてくるのでしょうか。戦争という暴力をもたらすのが人間なら、平和を実現するのでも人間です。イエスも具体的な現実のなかで御言葉を語りました。「平和を実現する人々は幸い」という御言葉を噛みしめながら、平和旬間が平和を祈る歩みの時となりますように。

この項では「運営委員会」の
中身について少々述べてみた
い。

ヨゼフ会黙想会

新納 春雄

ヨゼフ会の黙想会を五月三十一日(土)から六月一日(日)にかけて、「汚れなきマリア修道会」でおこなった。町田教会に高木神父をお迎えして今年で六年目になるが、同神父の指導による第一回の黙想会となった。実は同神父の着任以来、毎年マリア修道会に申し込みをしてきたが部屋が取れず、今年やっと実現したのである。部屋の関係で十四名限定の一泊研修となった。

全体の日程

- 5月31日(土) 午後3時集合
- 4時～5時半…高木神父講話
- 5時半～6時…年間第九主日 前晩の祈り
- 6時半～7時半…夕食
- 8時半…夕食
- 6月1日(日) 7時半起床
- 8時…朝食
- 9時…朝の祈り・解散後町田教会ミサに参加

テーマ

- (1) 小教区教会の課題と試み
- というテーマを中心に。
- (2) 聖書「天地の創造」(1章1

節) 2章25節)、裁きの追放(3章8～24節)、創世記で展開される人間観(2章15～17節および18～25節)など。

最初に、黙想会の目的は日常生活を離れて自分を見つめること(内観)であるとの説明がなされ、講話に入った。

第二回八チカン公会議を中心とした教会の在り方の変化を「パラダイムの変換」という視点で述べられた。ちなみに「パラダイム」とはギリシャ語で、「考え方・理解」の枠組を意味することのこと。一通りの説明のあと、小教区教会の課題と試みのテーマに関する講話へと進んだ。

夕食前は、現在は「教会の祈り」と呼ばれている、いわゆる「聖務日課」の時間となり、「年間第九主日前晩の祈り」を聖堂で唱えた。

久し振りのヨゼフ会の黙想会は、食後の語らいも神父様を交えての楽しい団らんとなり、初めての参加者からもよい勉強ができた、次回への参加希望が寄せられた。

広報より 次回の黙想会は次の通り予定されています。日程 2009年5月30日(土)～31日(日) 一泊研修場所 汚れなきマリア修道会・町田修道院

終戦記念日に寄せて

歴史の真実に、はつきりと眼を開いて見つめたい

務川 主

沖繩戦の体験者が、口を酸っぱくして「集団自決には軍の関与があった」と証言しているのに、当局は「軍の関与なし」と否定している。

同様なことを私は中国最前線での目撃者としてしてきた。当時、旧制高等学校に在学中の私は、徴兵年齢の引き下げに遭い、幹部候補生現地教育の名目で学徒兵として中国に送られた。山西省の黄河流域、中国共産党の領袖、毛沢東の本拠地「延安」を望む境界の

地である。

そこへ送り込まれた私は眼を疑った。或る日、軍用トラックで銃剣付きの兵に監視された朝鮮女性(敢えて言う、韓国ではない)が三人送り込まれてきた。言わずと知れた慰安婦である。私達、学徒兵は「お前等、初年兵の出る幕じゃない、引込んで」と疎外されたのは本当に幸いであつた。古兵の相手をさせられた彼女等は、翌朝また軍用トラックに乗せられて、隣の

ワンポイント聖書



(168)

前島 誠

その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女は、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れていた。

で主語「二人は」が来る。行動をすべてに優先して考える聖書の民の特徴だ。
・「神」エロヒム「正義」(一般名詞)、「主」アドナイ「愛」(固有名詞)。「神なる主」と併記される場合には、「憐み」のニュアンスで使用される。

エデンの園で、禁じられた木の実を口にした後、人とその妻に何が起こったのでしようか。引用の前半の部分、ヘブライ原文に沿って直訳するところとなります。

・「歩く音」 原文は単に「主の声」。
・「その日、風の吹くころ」(新共同訳)「園の西側、日の沈む方角」ラビ・エリムンク著「トーラーの呼び声」。

「そして聞いた、二人は、神なる主の声を――(その声は)園の中を歩き回っていた、日の風のままに」

にありました。かつてイスラエルの神、主はここに臨在したのです。今もユダヤ人が聖所として尊ぶ西壁(嘆きの壁)は、その名残りでした。

今回は、後者のテキストから読み取れるヒントをいくつかご覧いただきましょう。
・文頭が動詞「聞いた」で始まり、次い



初聖体おめでとう、五月十八日

五月十八日

我が軍の駐屯地に送られて行くのであった。

従って彼女等と直接言葉を交わしたのではないが、古兵の話によれば、彼女等は「日本に行けば、食料、仕事も充分」という甘言に惑わされ、乗せられた船は日本どころか中国へと向かったのだという。拉致同様の形で慰安婦にされたのに、戦後の当局は、「慰安婦はあっても、彼女等は進んで希望したが、合意の上であった」と主張しつづけている。

どうしてそこまで現実を直視しないで、体裁だけ繕うのであるのか。これでは近隣諸国の聲を買い、円満な外交関係に釘を差すことになるのではなからうか。



犠牲 献金

中高生会

- 5月4日 12,851円
(ペロニカ苑へ)
- 6月1日 6,160円
(ペロニカ苑へ)
- 7月6日 15,090円
(ペロニカ苑へ)

「雷の子」次号編集会議予定

9月14日(日)09時30分

於会議室

最近、一面トップが毎号異なつたスタイルのワイドで飾られていることにお気づきのことと思います。現在、広報では三名の方に交替で口絵の担当をお願いしています。伝統的な墨絵のスタイルでおなじみの遠山悦子さん、流麗なペンさばきと色使いのイラストレーター池永廣美さん、そして国際的に活躍をされている画家隠地妙さん。今後とも三者三様の個性的なワイドを楽しみにしていきたいと思えます。

カトリック町田教会
献堂 50周年記念誌



50周年記念誌が完成!

町田教会の50年の歩みを貴重な写真と文章とで綴ったオールカラー56ページ。
50周年記念事業の一環として、各家庭に1冊ずつ配布いたします。

50周年記念誌編集委員会

信 者 動 静

2008年5月～7月

(個人情報のため、削除しています)